

次期学習指導要領(案) パブリックコメントは3月15日まで

2月14日に次期学習指導要領(案)が発表されました。小学校3年生から英語、総授業時数を増やす、小学校でプログラミング教育、小学校中学校で「主体的・対話的で深い学び」、幼稚園の教育要領で文化や伝統に親しむとして「国歌」を例示しています。そして「どんな場面でもどんな学習活動が…」にまで言及したこともあり、記述量は1・5倍に増えました。

究極のつめ込み

教育内容の削減は行わないと明言し、改訂がすすめられた結果、小学校4年生以上は年間1015時間となり、中学・高校と同じ時間数となります。この時間数は究極のつめ込み教育と批判された、1989年学習指導要領と同じ時間数です。しかし当時は週6日制でしたが、今回は週5日制であるために、この時点でのつめ込み教育になります。私たち教師は、いつ教材開発や教材研究をすればいいのでしょうか。学校嫌いを大量に生み出さないか大変心配です。

道徳の「教科化」

次期学習指導要領に先立つて、小学校では2018年度から、中学校では2019年度から道徳の「教科化」が全面实施されます。

徳目に基づいた教科書が作られ、教師には教科書使用義務が課されることになります。加えて評価も行わなければならないません。

特定の価値観を授業によって押しつけることにならないか、子どもたちの道徳性に優劣をつけることにならないか、大きな問題をはらんでいます。

3・4年生から 外国語活動

3・4年生では外国語活動が始まりますが、これまで通り、同時にローマ字も習うため、子どもたちの中に混乱が起ることが予想されます。

5・6年生では教科としての英語が始まります。その中で取り扱う語彙数は、600〜700語となっており、現行の中学校学習指導要領が3年間で1200語であることと比較しても、

究極のつめ込みになることは明らかです。小学校段階から、英語嫌いが生まれる危険性があります。

そして、中学・高校の英語では、授業のすべてを英語で行い、語彙数も高校卒業レベルで5000語としており、教育内容の増加と高度化が見られます。

人間性の規定

学習指導要領では、国が育てるべき「資質・能力」を示し、その中で「人間性」にまで言及しています。教育の目的は、「人格の完成」をめざすことであり、国の育てたい人間をつくることではありません。「人格の完成」は誰かの手によってなされるものでなく、一人ひとりの子どもが、自分の能力を全面的に発達させることによって可能になるものです。学習指導要領に人間性が規定されることがあつてはならないことです。

各新聞記事より

朝日新聞は社説で、「現場の創意工夫を大切に」とタイトルし、「先生一人ひとりに、新たな発想を生み出す時間の余裕と研修の機

会を」と文部科学省に提言しています。

毎日新聞は、「がんじがらめは避けよ」のタイトルで、「個別の子供にふさわしい指導や機微、成長は現場が最も知る。一律の締めつけや無理を強いるものにならないようにするのが肝要だ」と忠告しています。

読売新聞は、「主体的に学ぶ授業への転換を」とタイトルし、「授業の質を高めながら、これだけの学習量をこなすことが可能なのか。教員の事務作業や部活動の負担軽減も含めた学校現場の体制整備を急がなければならない」と教職員の多忙化改善の手立ての必要性を主張しています。

パブリックコメント

文部科学省は、学習指導要領案に対する意見公募手続き(パブリック・コメント)を実施しています。

学年末の忙しい時期ですが、少しでも学習指導要領が子どもの現状と教職員の願いにそつものになるよう、意見を送りましょう。

